

青森県立郷土館所蔵の写真絵はがきについて

滝本 敦¹⁾

A Study on the Picture Postcards in the Possession of Aomori Prefectural Museum
TAKIMOTO Atsushi

Key words : 写真絵はがき、歴史資料、メディア・報道、観光名所、風物、記念

1. はじめに

青森県立郷土館では、絵はがきの画像に焦点をあてた特別展「撮られた青森 絵はがきと写真で見る近代」を平成 12 (2000) 年に開催している。その際、主に県内外の施設・個人等が所有する明治末から昭和 40 年代頃までの写真絵はがきを約 1000 点展示した。当館も開館以来絵はがきの寄附を受けてきており、特にこの特別展以降の約 20 年間に収蔵した数は多く、これまでもその一部を展示や調査研究に活用してきた。写真絵はがきの写真は、撮影された時代の世相や情景などを知ることができるため、写真資料と同様に貴重な記録である。また、同じ版から複数枚印刷できることから、発行・保管されている数が多い場合もあり、活用もしやすい。

一方で、写真絵はがきはかねてより歴史資料として扱うには課題があるとされてきた。理由は、写真の撮影時期や絵はがきの発行時期を正確に特定できない場合が多いからである。

本稿では、写真絵はがきの課題を踏まえつつ、当館所蔵の写真絵はがきの種類や題材等について調査・整理した内容を報告する。なお、今回の調査では、被写体が青森県内のもの、または発行元が青森県内の業者のものなど、青森県に関係がある写真絵はがき 1060 点を対象とし、補足のため一部県外のものも取り上げた。

2. はがき・絵はがきの歴史と写真絵はがき²⁾

(1) はがき・絵はがきの歴史

日本では、欧米諸国とほぼ同時期の明治 6 (1873) 年に、はがき (公的機関発行の郵便はがき、いわゆる官製はがき) の使用が開始された。一方、はがきに絵や写真を印刷した絵はがきの誕生については、はっきりとした時期が特定されていない。公的に絵はがきが発行されていなくても、個人的にはがきに印刷をすることが可能だからである。このことをふまえた上で、一般的に絵はがきの誕生は、私製はがきの使用が認可された明治 33 (1900) 年 10 月とされている。実際に、認可直後に絵はがきが雑誌の付録になったり、通信用に使用されたりするなど、この時を契機に絵はがきの生産、売買、使用が広まった。

その後、明治 37 (1904) 年に始まった日露戦争が、絵はがきの一大ブームを引き起こすきっかけとなった。攻略や凱旋を記念して通信省が戦役記念絵はがきを発行し、記念スタンプ印も押されたため、そのセットを求める人々が郵便局前に長蛇の列を作った。この長蛇の列の様子も絵はがきの題材になるなど、人々の熱狂ぶりがうかがえる。

この頃には、軍事関係、美人、風景、風俗等の題材や、写真、油絵、水彩画等の手法、さらにはヌーボー式、モザイク式、透かし絵等の形式といった、多種多様な絵はがきが誕生した。また、地方都市での印刷・発行も行われるようになり、絵はがき販売店やコレクターが増加するなど、絵はがきは人々の通信手段・収集物として広まっていった。

(2) 写真絵はがき

欧米で絵はがきが誕生した 19 世紀後半ころには、すでに写真は普及していたが、絵はがき用に質を保ちながら大量に製版する技術はまだなく、絵はがきはイラストの印刷が中心だった。その後 19 世紀末に初めて写真絵はがきが登場するとともに、良質かつ大量のコロタイプ印刷が可能となり、写真絵はがき自体の質も向上した。その結果、絵はがきの印刷の中心はイラストから写真へと移った。

日本では明治中期にすでにコロタイプ印刷が試作され、比較的早く導入された。その後、大正期には印刷技術の改良により大量印刷が可能になり、日本でも写真の絵はがきが主流となった。一方、色付きの写真絵はがきは明治期に発行され始めているが、当時はまだカラー写真がなかったため、白黒の写真に人工的に色を施した手彩色のものであった。青森県内の業者が発行した写真絵はがきにも手彩色のものがあるため、全国と同様に県内でも手彩色写真絵はがきが製作されていたと考えられる。

3. 写真の撮影時期と絵はがきの発行時期

写真絵はがきの写真の撮影日や、絵はがきの発行年が表記されることは稀である。写っている建物の建築年月日や事象の発生時期など、被写体の内容を手掛かりに写真の撮影時期を推測することは可能であるが、正確な撮影日を特定することは非常に難しい。

1) 青森県立郷土館 主任学芸主査 (〒030-0802 青森市本町二丁目 8-14)

一方、絵はがきの発行時期については、表面の様式等の変化の年代と照らし合わせることで、大まかな時期を推定できる。戦前の変化の1つは通信欄のスペースで、私製はがき使用認可直後の通信欄スペースがない状態から、段階的に拡大された点の特徴である。もう1つは「郵便はがき」の文字表記で、「はかき」表記から濁点がついた「はがき」となった点である。戦後は文字表記の左書きへの変化、郵便番号導入が主な変化である。これら表面の様式の変化の概要をまとめると、以下の表1のとおりである³⁾。

【表1】

	時期区分	表面の様式等の変化
①	明治33(1900)年～ *私製はがき使用認可以降	通信欄のスペースなし(表面には住所・宛名のみ記載)
②	明治40(1907)年～	表面の下部3分の1が通信欄スペースになる
③	大正7(1918)年～	通信欄が表面の下部3分の1から2分の1に拡大
④	昭和8(1933)年～	表面上部の文字「郵便はかき」が「郵便はがき」に変更(表記は右書き)
⑤	昭和20年代初期(1945年～)	表面上部の文字「郵便はがき」が左書き表記に変更 ⁴⁾
⑥	昭和41(1966)年	通常葉書のサイズ拡大(9×14cmから10×14.8cmに変更)
⑦	昭和43(1968)年	郵便番号導入(3桁または5桁)
⑧	平成10(1998)年	郵便番号ケタ数変更(7桁に増加)

この時期区分をもとに写真絵はがきの発行時期はある程度推定できるが、注意点がいくつかある。まず、写真が撮影された時期とその写真を使用した絵はがきの発行時期が必ずしも同時期ではないという点である。写真の撮影後すぐに印刷に使用されず、数年を経たから使用される場合や、同じ写真が数年間にわたり繰り返し使用されている場合がある。当館所蔵のものにもみられる事例で、特に、自然風景や伝統的祭礼など、撮影の構図がほぼ決まっている場合や、被写体の内容の変化が少ない題材に多い。

また、戦前の絵はがきは1枚の紙ではなく、数枚の紙を重ね合わせる製法も用いたため、裏面に写真を印刷する業者と、表面を製作者が異なる場合もある。そのため、数年前に印刷した古い裏面の紙に、新しい表面の紙を貼り合わせている可能性もある⁵⁾。

他、写真の撮影時期については、被写体の内容から推測する、もしくは上記表1に基づいた絵はがきの発行時期を推定したうえで、少なくともそれ以前に撮影された、と推測することになる(例えば「郵便はがき」の表記になったのが昭和8年のため、その様式の絵はがきの写真は、少なくとも昭和8年以前に撮影されたと推測)。

写真の撮影日の特定は困難であり、その結果、写真絵はがきを歴史資料として扱うことは難しいとされる。一方で、上記の注意点を考慮することを前提として、絵はがきに印刷された質の良い写真は過去を知る貴重な記録として活用できると考える。

4. 当館所蔵の写真絵はがきについて

本稿では、当館所蔵の写真絵はがきを、(1)メディア・報道(災害・事件)、(2)観光名所(名所・旧跡等)、(3)風物(各地の風景・行事・祭礼等)、(4)記念(開催・周年・落成等)、(5)その他、の5つの視点で分類し、各分類の代表的なものを掲載した。(5)その他では、調査をしている中で判明した特殊なものを取り上げている。なお、当館所蔵の写真絵はがきは戦前(昭和20年以前)発行のものが多いため、掲載したものの多くがこの時期のものとなっている。

各写真絵はがきには、裏面に印字されているタイトル(旧字を含め、原則として原文そのまま記載)と、発行時期等を情報として付した。発行時期等は【 】内に表面の通信欄のスペースの大きさ(3分の1⇒1/3)、[はかき・はがき]の表記状況を記した上で、前掲表1に基づいた発行時期を示すこととし、被写体の内容などから詳細に時期を推定できる場合は、特にその内容を記載した。

(1) メディア・報道(災害・事件)

明治期の写真絵はがきは、災害や事件の現場を題材とし、新聞や雑誌と同様に情報を伝えるメディアという性格もあった。2(2)で述べたように、解像度の高いコロタイプ印刷のため、新聞記事の写真よりも高画質で、写真内の文字まで読み取ることができた。また、災害や事件の現場で撮影された写真がすぐに印刷され、発生後わずか数日で発行される場合もあったため、速報性も高いという特徴があった。一方、この種の写真絵はがきは差出人から受取人に送られることで、その状況・惨状を伝える手段にもなった⁶⁾。

写真1は大正12(1923)年9月1日に発生した関東大震災の被災状況を撮影したもので、約3万8千人の犠牲者を出したとされる被服廠跡の様子である⁷⁾。発行を急いだ、もしくは設備が被災したためか、表面の住所・宛名部分と通信欄を区分する線がなく、切手を貼る枠のみ印刷されている。また、裏面の名称は手書き・左書きで、誤記入部分を白塗りにした状態で印刷され、絵はがき自体もゆがんだ形で裁断されている。当館所蔵の関東大震災の写真絵はがきには、同様のものが複数見られる。

写真2は、明治43(1910)年5月3日に青森市で起こった青森大火の被災状況を撮影したもので、住居を失った被災者の仮住居の様子である。この大火は中心市街地の多くを焼き尽くし、焼失家屋が五千戸以上という大惨事となった⁸⁾。この写真からは仮住居の

様子や人々の服装等も知ることができ、当時の状況を今に伝える貴重な記録でもある。なお、この絵はがきは青森市の人物が下北地方の人物に宛てて送った使用済みのもので、通信欄の文面は大火翌年の明治44（1911）年元旦の年始の挨拶である。祝いの言葉とともに、未曾有の災害の惨状も伝わったはずである。



写真1 「大正 12. 9. 1. 東京大震災実況 惨憺たる被服廠跡」
【通信欄を示す線無し、〔郵便はがき〕右書き、発行：大正12（1923）年か】



写真2 「(青森市大火)罹災者仮小屋住居ノ状況」【通信欄1/3、
〔郵便はがき〕右書き、発行：明治43（1910）年】

(2) 観光名所（名所・旧跡等）

観光名所の写真絵はがきは、その場所、その瞬間でしか見られない風光明媚な自然風景や旧跡の歴史的景観を記録している。絵はがきは持ち運びに便利であり、比較的価格も低いため、旅行の記念・思い出として自分の手元に置いたり、親しい人へ贈ったりする代表的なお土産となった。

写真3・4は十和田湖・奥入瀬渓流の写真絵はがきの代表的な題材である銚子大瀧（子の口の瀧）である。四季折々の神秘的な景色が見られる十和田湖と、緩急自在に流れる清流や雄大な滝を眺められる奥入瀬渓流は、美しい自然景観や豊かな文化遺産の名所が数多くある青森県のなかでも随一の景勝地であり、代表的な観光名所の1つである。

十和田湖は古くは修験者の修行地として知られていたが、明治41（1908）年にこの地を訪れた文筆家の大町桂月が、その美しさに感動し、紀行文を雑誌『太陽』に掲載すると、景観美が全国に知られるようになった⁹⁾。その後、昭和2（1927）年、東京日日新聞社と大阪毎日新聞社の主催により、昭和を代表する新しい観光地「日本新八景」の選出が企画された。山岳・渓谷・湖沼などの8部門が設定され、はがきによる人気投票と審査により、十和田湖は湖沼の部で八景の1つに選ばれた¹⁰⁾。一方、昭和11（1936）年に十和田・八甲田地域が「十和田国立公園」として指定され、昭和31（1956）年には八幡平地域を加えて「十和田八幡平国立公園」となっている。十和田湖一帯を写した写真絵はがきは何度も発行され、変わることのない景観美はいつの時代も人々を魅了している。



写真3 「(十和田湖)奥入瀬渓谷中の最大壯観銚子大瀧」【通信欄1/2、〔郵便はがき〕右書き、発行：大正7（1918）年～昭和8（1933）年】



写真4 「奥入瀬の溪流美 銚子大瀧」【通信欄1/2、〔郵便はがき〕左書き、発行：昭和20～30年代か】*実物はカラーの彩色

写真5の弘前公園（弘前城跡）は桜の名所として知られ、写真絵はがきも桜を題材にしたものが多い。この写真絵はがきも桜を主題としつつ、本丸の天守と背後に見える岩木山を取り入れた景色の構図となっている。

弘前公園の桜は、明治10～30年代に、旧弘前藩士の内山覚弥、菊池権衛らの手により園内各地に植樹され、やがて「桜の名所」とよばれるようになった。写真5にも桜の木が写っているが、植樹から間もないからか、樹形が小さいものも見える。

一方、この写真絵はがきは注目すべき点がもう1つあり、天守の下方を見ると石垣が崩壊しているのがわかる。現在、本丸東側の石垣解体修理が進められているが、過去にも明治27(1894)年と明治29(1896)年の2度、本丸東側の石垣が崩落し、修理を行った歴史がある。特に29年の崩落時は、天守が倒れるのを防ぐため、翌30(1897)年に弘前市出身の大工棟梁の堀江佐吉により天守が本丸内部西側方向に曳屋された。その後、石垣修理は少し時を経て大正4(1915)年に完成し、天守をもとの位置に曳き戻した¹¹⁾。

写真左側の印字「大正元年拾月廿貳日」(表面の消印も同日)や表面の様式からも、この場面が29年の石垣崩落に伴う翌30年の曳屋の実施後から大正4年の修理までの間に撮影されたものと推測できる。この写真絵はがきは、観光名所の紹介という側面と、石垣崩落とその修理までの過程が撮影された記録写真という意味合いがある。

写真6は同じく弘前公園の桜が題材だが、当館所蔵の弘前公園の絵はがきでは数少ない夜間の様子を撮影したものである。大正7(1918)年に始まった観桜会の初期のころから園内のライトアップははじまっており、この写真も中央奥には提灯が下げられ、その右側にはライトの発光部分が写っている。

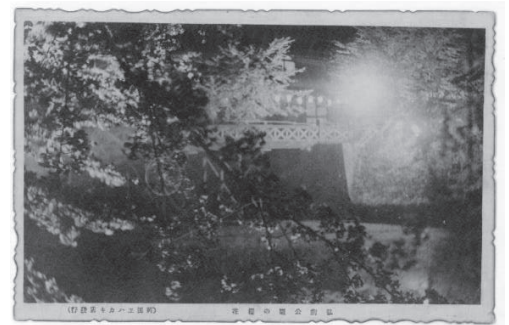


写真6 「弘前公園の桜花(岡田エハカキ店発行)【通信欄1/2、[郵便はがき]右書き、発行:大正7(1918)年~昭和8(1933)年】

写真5 「(弘前名所)弘前公園櫻(野原寫眞館発行)【通信欄1/3、[郵便はがき]右書き、発行:明治40(1907)年~大正元(1912)年】

写真7の題材は青森県を代表する温泉地の浅虫で、温泉はさることながら、海岸沿いの島々を望む景色も有名だった。特に、かつての浅虫遊園地(別名馬場山遊園地。現浅虫公園)から湯の島を望む構図のものがよく知られ、何度も発行されている¹²⁾。

写真8は北前船の風待湊であった深浦湊の象徴的な景観で、信仰の対象でもあった猿神鼻岩が題材である。海側に張り出すように位置しているため、通行の際の難所とされ、明治期の道路改修工事の際に洞門が作られた。洞門完成後の様子が写されており、現在は手前の海部分も埋め立てられ、町役場や港が整備されている。



写真7 「(浅虫温泉)遊園地より湯の島を望む【通信欄1/2、[郵便はがき]右書き、発行:大正7(1918)年~昭和8(1933)年】*実物はカラーの彩色



写真8 「深浦港猿神鼻の壁洞(深浦村役場発行)【通信欄1/2、[郵便はがき]右書き、発行:大正7(1918)年~昭和8(1933)年】

(3) 風物(各地の風景・行事・祭礼等)

その地ならではの風景、街並み、行事、伝統的祭礼等、各地を代表する題材は、その土地に住む者にとっては日常的な光景であっても、外部の者にとってはその土地の風物を知る格好の手段となった。風物を題材とした写真絵はがきは、複数枚がセットで発行さ

れることも多く、その地を紹介する宣伝の役割も担った。

写真9の八戸市長根スケートリンクがあった長根地区には、藩政期、八戸城下に点在した水濠・ため池の1つである売市堤があり、明治期以降はボート遊びや魚釣りを楽しむ場となった。また、冬季には水が氷結するため、その天然氷を利用したスケートリンクとしても利用されるようになった。氷の質が良いことから、やがて八戸を代表するスケートリンクとなり、昭和5(1930)年に開催された第1回全日本スピードスケート選手権大会の会場にもなっている。

戦時中は一時干拓されて水田となったが、戦後スケート場として再整備された。昭和44(1969)年には天然氷からパイピングのリンクに生まれ変わり¹³⁾、令和元(2019)年に国際大会が開催可能なリンクを備えた八戸市長根屋内スケート場が完成して運用を終了するまで、国際大会の会場、市民の憩いの場として長年親しまれた。八戸市長根スケートリンクは「氷都」八戸を代表する場所であり、この絵はがきはまさに八戸の風物を写したものだといえる。

写真10は、同じく八戸市に関するもので、国の重要無形民俗文化財に指定されている「えんぶり」を撮影したものである。5人の太夫が見え、中央の「藤九郎」の烏帽子には牡丹の花がついていることから、ながえんぶりの組であること¹⁴⁾、また、太夫が帯刀している様子など、細部まで見て取ることができる。なお、当館では写真10と全く同じ写真を使用した絵はがきが他にもあり、こちらの表面は戦後の様式(通信欄1/2、[郵便はがき]左書き)となっている。同じ写真が繰り返し利用されている事例といえる。



写真9 「八戸市長根スケートリンク(青霞堂写真館発行)【通信欄1/2、[郵便はがき]右書き、発行:昭和8(1933)年~昭和20年代初期】



写真10 「郷土藝術八戸豊年祭(えんぶり)(青霞堂写真館発行)【通信欄1/2、[郵便はがき]右書き、発行:昭和8(1933)年~昭和20年代初期】*セットの包紙には「青霞堂写真館発行」「電話二七一番」の表記

写真11は冬の弘前市の写真絵はがきで、場所は弘前公園北側の外濠付近を東側から撮影した様子である。遠くに岩木山が見え、手前では凍結した濠の上を子どもがスキーで歩いている。また、濠の奥の方に目をやると、四の丸と城外を結ぶ亀甲橋かめのこぼしも見える。

写真12は田名部町(現むつ市)を流れる田名部川に架かる大橋の北側から、その先の大通りの方向を撮影した様子である。画面右下から中央奥にかけて、大正10(1921)年から昭和16(1941)年まで運用された田名部運輸軌道の馬車軌道¹⁵⁾のレールがみえる。「大湊要港部検閲済」の印字があるが、大湊要港部は昭和16年までの名称のため、表面の様式とあわせて発行時期を推定した。



写真11 「(雪の弘前)公園外濠より岩木山遠望【通信欄1/2、[郵便はがき]右書き、発行:昭和8(1933)年~昭和20年代初期】*セットの包紙には「高級ブロマイド式」「弘前市土手町岡田商店発行」の表記あり



写真12 「田名部市街 大橋より北方大通を望む(立花写真館撮影)(大湊要港部検閲済)【通信欄1/2、[郵便はがき]右書き、発行:昭和8(1933)年~昭和16(1941)年】

写真13～16は、4枚を順に並べることで深浦港の全景を表現したもので、港が湾の形状になっているのが一目でわかる仕組みになっている点が興味深い。港内には帆船も停泊し、街並みに目をやると漁村によくみられた石置き屋根の建物も写っている。通信用に1枚ずつ使用してしまうとわからないが、4枚セットで保存することで記念品のような意味合いも生まれる。

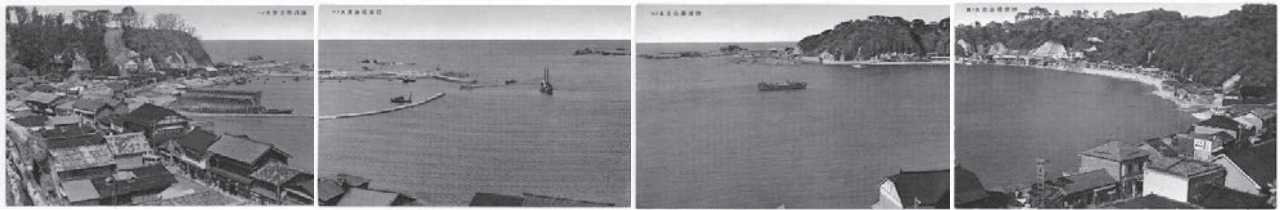


写真13～16 左から「深浦港全景其ノ一」～「深浦港全景其ノ四」【通信欄1/2、[郵便はがき]右書き、発行：昭和8（1933）年～昭和20年代初期】*実物はカラーの彩色。包紙には「深浦風景絵葉書」「高級原色版八枚組」「発行所島川榮吉商店」「¥20」の表記あり

写真17に写っているのは、昭和22（1947）年に就航した青函連絡船洞爺丸である。洞爺丸の同型船（洞爺丸型）は他に、羊蹄丸、摩周丸、大雪丸があり、この写真絵はがきも計4隻の4枚セットとなっている。昭和23（1948）年に4隻目の大雪丸が就航している点、及び洞爺丸が昭和29（1954）年に沈没している点¹⁶から、発行時期は昭和23年～29年の間と推定できる。なお、表面の「郵便はがき」の文字は戦前と同じ右書きであり、私製絵はがきにおける左書きへの移行時期を検討する材料の1つといえる。

写真18のように、青森県を代表する農産物であるりんごを題材とした写真絵はがきも、戦前から数多く発行されている。鮮やかに彩色されたものや、収穫作業の様子を撮影したものもよく見られる。

写真19は昔の青森ねぶたで、小型の担ぎねぶたの形態の時期に撮影されたものである。当時は担ぎ手と補助役4人で運行しており、補助役がもつ4本の棒が四隅に取り付けられている¹⁷。



写真17 「洞爺丸（青函連絡船）」【通信欄区分なし、[郵便はがき]右書き、発行：昭和23（1948）～29（1954）年か】



写真18 「（青森名産）りんご」【通信欄1/2、[郵便はがき]右書き、発行：大正7（1918）年～昭和8（1933）年】*実物はカラーの彩色



写真19 「（青森名物）佞武多 阿部宗任 貞任」【通信欄1/2、[郵便はがき]右書き、発行：大正7（1918）年～昭和8（1933）年】

(4) 記念（開催・周年・落成等）

写真絵はがきはイベント・行事の開催時や周年の節目、建築物の落成の際にも発行された。慶事として関係者に配られることも多く、絵はがきは記念品の定番でもあった。

写真20の第五十九銀行青森支店は昭和6（1931）年に落成し、のち青森銀行本店として使用されたあと、現在は当館の特別展示室となっている。設計者は弘前市の青森銀行記念館をはじめ、県内の洋風建築を数多く手がけた堀江佐吉の七男、堀江幸治である。鉄筋コンクリート造2階建てで、営業室部分の8本の円柱と開放感のある吹抜などを特徴とし、古典主義の要素を持ちつつ、細部装飾を省略したモダニズム建築である。落成時には外観や内部の写真絵はがきと建物の概要を記したカードがセットで発行された。

昭和20（1945）年の青森空襲の際も焼失せず、その後、青森銀行本店の移転に伴って県へ寄贈され、昭和48（1973）年に開館した当館の施設として活用されることになった。円柱柱頭や天井の装飾、第五十九銀行にちなんで「5」と「9」をデザインした階段手すりのレリーフ、ブナ材の床など、建築当時の原型を残しており、平成16（2004）年には国の登録有形文化財に登録された¹⁸。

写真21の青森市立商業学校は、笹森儀助により明治35（1902）年に創設された私立青森商業補習夜学校が、青森市立商業補習学校への改称を経て、明治40（1907）年の組織改編で設立された、現在の青森県立青森商業高等学校のもととなった学校である。大正6（1917）年に創立10周年を迎え、記念式典を挙げて校歌も制定した¹⁹。合わせて、写真21の他、歴代校長の顔写真や運動場・校舎の写真の絵はがきが記念として発行されている。



写真 20 *名称記載なし。株式会社第五十九銀行青森支店新築記念絵葉書セットのうちの1枚。当時の営業室、現青森県立郷土館特別展示室の様子【通信欄 1/2、【郵便はかき】右書き、発行：昭和6（1931）年】



写真 21 「青森市立商業学校創立十週年記念 球算教授」
【通信欄 1/3、【郵便はかき】右書き、発行：大正6（1917）年】

写真 22 は、青森飛行場が昭和8（1933）年に竣工式を挙行した際に発行された記念絵はがきである。飛行場は昭和12（1937）年から旅客定期運航が開始されたが、3年後には航空機の老朽化に伴って休止となり、その後、陸軍飛行場として使用されたあと、戦中には空襲を受けて飛行場としての機能が失われた。戦後は水田などを経て宅地造営が進み、現在の野木和団地となった²⁰⁾。

飛行場運用時、正門右側の門柱上部に「AOMORI AIRPORT 青森飛行場」と刻まれたプレート状の門標石が設置されており、現在は旧青森飛行場記念碑として保存されている。写真 22 も拡大するとこの門標石が確認でき、写真 22 を含む記念絵はがきセットの包紙（写真 23）は、この門標石に刻まれた文字がデザインされている。

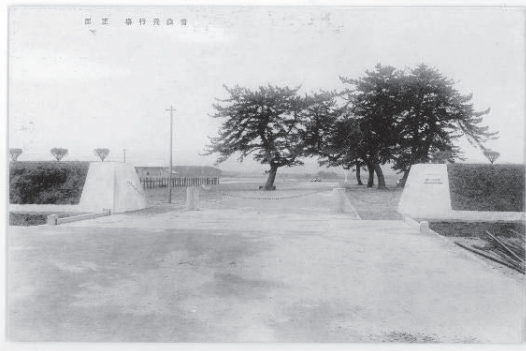


写真 22 「青森飛行場 正面」（青森飛行場竣工式記念の絵はがきセットのうちの1枚）【通信欄 1/2、【郵便はかき】右書き、発行：昭和8（1933）年】



写真 23 写真 22 を含む青森飛行場竣工式記念の絵はがきセットの包紙

(5) その他

ここでは、当館所蔵の写真絵はがきを整理・調査をしている中で判明した特殊な絵はがきを取り上げた。

写真 24 は深浦港に蒸気船が入港している様子を題材にしているが、細部をよく見ると、全体の構図や蒸気船の角度に違和感がある。写真絵はがきでは写真に加工・修正を加えることがあり、この絵はがきもその可能性が高い。このような加工・修正や、手彩色が施されているものは、実際の被写体とは異なって表現されている場合があるため注意が必要である。

一方、写真 25 は絵はがきの表面にズレが生じている。印刷、または裁断の際に生じたのであろう。ちなみに裏面の写真はズレがなく、正常の状態である。このようなズレも、製作技術がまだ低かった時代の絵はがきにもみられる事例である。



写真 24
「名所津軽 深浦全景 其三（深浦港小野商店発行）」【通信欄 1/2、【郵便はかき】右書き、発行：昭和8（1933）年】



写真 25
ズレがある絵はがきの表面【通信欄 1/3、【郵便はかき】右書き、発行：明治40（1907）年～大正7（1918）年】

5. おわりに

本稿では、当館所蔵の写真絵はがきを整理・調査した内容にもとづき、写真絵はがきの概要を述べ、一部資料の紹介をすることとどまった。一方、各写真絵はがきの様式や被写体の内容を再確認することで、新たな発見もあった。写真絵はがきを歴史資料として扱うには課題があるが、撮影された場面・被写体が歴史的記録という性質があるのは確かである。今後も引き続き調査を進めていきたい。

また、写真の内容だけに限らず、絵はがきに関する調査内容は他にも多岐にわたる。写真の撮影者や絵はがきの発行者の特徴や分類、県内における写真絵はがきの製造や流通の過程などについての調査も今後の課題としたい。

《注》

- 2) はがきや絵はがきの歴史・概要については、細馬宏通 2006年「絵はがきの時代」青土社に詳しい。2(1)・(2)は同書p.17～22、264～272、285を参考にした。
- 3) 表面の様式等の変化については、郵政省郵便局郵便事業史編纂室編著 1991年「郵便創業120年の歴史」株式会社ぎょうせい、山口修編 1987年「郵便博物館」株式会社ぎょうせい、郵政省編 1971年「日本郵便切手・はがき図録」株式会社吉川弘文館を参照した。
- 4) 昭和21(1946)年12月27日発行の料額印面付記念絵はがき(図柄：日本国憲法公布)では左書きに変更。郵政省編 1971年「日本郵便切手・はがき図録」株式会社吉川弘文館(p.318)。一方、当館所蔵の絵はがきでは昭和23(1948)年頃発行と推定できるものでも右書きのものが確認された。
- 5) この点については、最新の写真を印刷した裏面の紙に、古い様式の表面の紙を貼り合わせるという、逆の事例も指摘されている。青森県立郷土館 2000年「特別展 撮された青森 絵はがきと写真で見る近代」展示図録 青森県立郷土館(p.8)。
- 6) 前掲2) 細馬(p.250～255)
- 7) 内閣府ホームページ「関東大震災100年 特設ページ」(<https://www.bousai.go.jp/kantou100/index.html>)
- 8) 青森市史編集委員会編 2014年「新青森市史 通史編第三巻 近代」青森市(p.253～257)
- 9) 青森県立郷土館 2011年「第3回地域総合展 十和田湖・八甲田山」展示解説書 青森県立郷土館 第2章(p.48～119)
- 10) 新田太郎 2005年「情報化する風景-「日本新八景」候補地の選考過程」(財団法人東京都歴史文化財団・東京都江戸東京博物館・毎日新聞社主催『美しき日本-大正昭和の旅』展図録 江戸東京博物館 所収)(p.176～183)
- 11) 弘前市都市環境部公園緑地課弘前城整備活用推進室編 2018年「史跡津軽氏城跡(弘前城跡) 弘前城本丸発掘調査報告書 一本丸石垣解体修理事業に係る発掘調査-」弘前市都市環境部公園緑地課弘前城整備活用推進室(p.18～25)
- 12) 前掲8) 新青森市史 通史編第三巻 近代(p.232～234)
- 13) 八戸市史編纂委員会 2010年「新編八戸市史 近代資料編IV」八戸市(p.541～549)
- 14) 八戸市史編纂委員会 2010年「新編八戸市史 民俗編」八戸市(p.458～471)
- 15) むつ市史編さん委員会 1986年「むつ市史 近代編(明治・大正時代)」むつ市(p.879～882)
- 16) 古川達郎 2008年「鉄道連絡船細見 海峡を結ぶ“動く架け橋”をたずねて」JTBパブリッシング(p.176～187)
- 17) 宮田登・小松和彦監修 2016年「青森ねぶた誌 増補版」青森市(p.171～181)
- 18) 青森県史編さん文化財部 2015年「青森県史 文化財編 建築」青森県(p.327～328)
- 19) 青森県立青森商業高等学校創立百周年記念誌刊行委員会編 2007年「青森県立青森商業高等学校創立百周年記念誌 青商百年史」青森県立青森商業高等学校創立百周年記念事業実行委員会(p.8～17、p.305～306)、青森市史編集委員会編 2000年「新青森市史 別編教育(別巻) 年表・学校沿革」青森市(p.267～269)
- 20) 稲垣森太 2008年「旧青森飛行場の歴史と現存する遺構」(「東奥文化」第79号 青森県文化財保護協会 所収)(p.53～83)

(主な参考文献)

- ・郵政省郵便局郵便事業史編纂室編著 1991年「郵便創業120年の歴史」株式会社ぎょうせい
- ・山口修編 1987年「郵便博物館」株式会社ぎょうせい
- ・郵政省編 1971年「日本郵便切手・はがき図録」株式会社吉川弘文館
- ・青森県立郷土館 2000年「特別展 撮された青森 絵はがきと写真で見る近代」展示図録 青森県立郷土館
- ・小森孝之 1978年「絵葉書 明治・大正・昭和」株式会社国書刊行会
- ・細馬宏通 2006年「絵はがきの時代」青土社
- ・橋爪紳也 2006年「絵はがき100年 近代日本のビジュアル・メディア」朝日新聞社
- ・富田昭次 2016年「絵はがきで楽しむ歴史散歩 日本の100年をたどる」株式会社青弓社
- ・田邊幹 2002年「メディアとしての絵はがき」(「新潟県立歴史博物館研究紀要」第3号所収)(p.73～83) 新潟県立歴史博物館
- ・毛利康秀 2013年「絵葉書のメディア論的な予備的分析」(「愛国学園大学人間文化研究紀要」第15号所収)(p.29～46) 愛国学園大学人間文化学部
- ・青森県史デジタルアーカイブシステム (<https://www2.i-repository.net/contents/kenshi-front/>)